

豊橋は愛知縣の東端に位置し、低き山の連なりて静岡縣との境をなす平野の只中にある。西は内海に、南は太平洋に面し、北は信州への門扉となる山々のゆつたりと構へ居る。余ここに生まれし十八年後に東京に上りたれば、豊橋の記憶は、はや半世紀を遡る。

實家の傍に西郷石油なるガソリンスタンドありて、夏には店のをぢさんの下着のシャツ一枚にて、訪れし車に油を入るる姿今も忘れず。そのをぢさん、今ひとつの仕事もつとて、縣境の山にて石灰岩堀りてはセメント會社に賣りたり。標高の東京タワーの半ばにも達せずと見ゆる山竝みのいづれも石灰岩より成り立てば、樹木の下はいくらもせず岩盤に當たり、場所により剥き出しの岩塊すらあり。

小學生の折、さなる岩の裂け目より舊石器人類の上腕骨出づれば、牛川原人とぞ名附くる。程無きに、向かひ斜面より三ヶ日原人の骨見つかりけり。をぢさんガソリンスタンドに立たぬ日は、つるはしを持ちて岩を碎き、もつこを擔ぎて山を下るは小學生の思ひ出なるに、その後の機械化甚だしく今は山の半分のみ残りて、急ぎ通り過ぎ行く超特急のぞみより、變り果てし山容を見る。その麓に西郷小學校あり、西郷氏の領地たり。

二代將軍徳川秀忠公の生母は、家康公の側室にありて美貌を謳はれし西郷の方にて、西郷氏の生まれなり。西郷氏は南北朝の折肥前にありて三河守護代に任ぜられ、そが本流肥前より三河に移動す。肥前にはわづかに庶流残りき。未だ松平氏勃興以前のことにて、かの岡崎城を築きたるはこの西郷氏なり。時代を下り、松平氏の勢力年毎に擴大したれば、西郷氏も漸次三河中を東へと移動し、現在の愛知静岡縣境近傍に領地を定めた。片や肥前に残りし西郷氏やがて南下し、つひには薩摩に至り、島津氏の配下として地歩を得たり。

西郷の方秀忠公を生みて、三河西郷氏大名に取り立てり。子孫の多くは親藩、譜代の重臣となり一族の命脈を保てり。取り分け會津藩にては筆頭家老の地位、代々三河西郷氏の裔務め、幕末戊辰戰爭に際し、西郷頼母家老を務めたり。片や官軍にありては薩摩西郷氏の裔なる西郷隆盛ありて、本流と庶流の思ひも掛け得ぬ遭遇實現す。この二人、共に己が出自を心得たれば、それゆゑの書簡のやりとりありて、明治の御世になりにてなほ續けり。

かくして肥前佐賀にルーツをもちたる西郷氏の三河と薩摩に分かれ、更に全國に散らしことを思はば、三河と肥前とに縁のあるはさらなり、人の知らざるところにつながりあるを思ひたり。かくの如き話を余曾て佐賀にありて人を前に紹介せり。